

山と博物館

第58巻 第2号 2013年2月25日

市立大町山岳博物館



写真1

写真2

写真1. 氷結した清音の滝 (撮影:平成25年1月7日) 写真2. 社・山下の道標

清音の滝

清水 隆寿

大町では、昨年末から平年にくらべ寒い日が続きました。その甲斐があつてか、中綱湖では7年ぶりに結氷。身を切るような冷たい風の中、氷に穴を掘って湖底のワカサギに釣糸を垂れる姿はまさに大町の風物詩です。これから暖かくなる3月から4月はワカサギの産卵期、季節はしだいに春へと移りかわっていきます。

写真1は、社常光寺にある清音の滝。この滝でも今年氷結が見られました。まさに極寒がなせる奇観。滝をつくるのは、今から約百五十年前の激しい火山活動の産物である溶結凝灰岩という岩石です。東山の各地にみられるこの岩石は、大町周辺では家庭や神社の庭石に用いられ、当地方にも自然が作り出した奇岩を楽しむ風雅がありました。

館ノ内と松崎との分岐点にあたる社山下地区には、かつて千国街道沿いに建立された清音の滝を道案内する江戸時代の道標(写真2)があり、線刻により「瀧ノ入」と刻まれ、仁科三十三番札所霊場であつた清音の滝へといざないます。

弾誓寺覚阿上人によって発案された仁科三十三番札所の成立が、江戸時代中期の宝暦7年(1757)。滝壺近くに芭蕉没後百年を記念して、地元常光寺村庄屋の横川青雅によって建立された芭蕉句碑は、寛政5年(1793)建立されるなど、文人墨客にも愛され大切にされた雅な地でもありました。江戸後期には観光名所として喧伝された仁科十二景の中にも清音の滝は紹介されています。また豊田利忠によつて善光寺参拝のための旅のガイドブックである『善光寺街道名所図絵』にこの滝が紹介されたのが嘉永2年(1849)年と、数百年にわたり大町を代表する低地観光の名所であつたことがわかります。

清音の滝を流れる、相川峠西麓を集水域とした新引沢(瀧ノ沢)は、一年中瀬切れがない安定した水量を持つことから、平安から中世にかけて仁科氏の居館建立時の立地選定に重要な役割を果たし、さらに古墳時代には大町を代表する盟主の古墳が中城原地域に、弥生時代には拠点集落が松崎地域に作られるなど、まさに大町のまちづくりの一丁目一番地にふさわしい、政治・経済を側面から支えた生命線としてこの河川の歴史的な重要性が見直されています。

(市立大町山岳博物館学芸員)

幕末から明治におけるイギリス外交官・

アーネスト・サトウの足跡と業績

金子 靖夫

サトウの足跡

アーネスト・メーソン・サトウは1843(天保14)年にイギリスのロンドンに生まれ、祖先是北欧系の移民で、ドイツ東北部のサトウ村に住んでいたため、サトウ姓はここから由来しています。

ロンドン大学在学中に、日英修好通商条約



写真1. アーネスト・サトウ肖像(横浜開港資料館蔵) (左)写真(右)肖像画

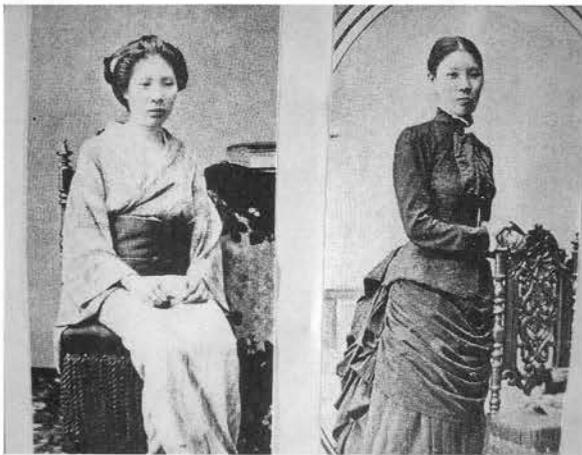


写真2. 和装と洋装の武田兼夫人(横浜開港資料館蔵)



図版1. 『ジャパン・パンチ』1871年9月号より、1871年8月サトウ(中央)が箱根に休暇旅行に出かけた際の風刺画(横浜開港資料館蔵)

調印で日本を訪れたエルギン伯爵の秘書ロレンス・オリファントが記したエルギン伯爵の中国・日本使節記を読み、未知の国日本に憧れて、外務省の通訳生試験に応募して合格し、19歳で日本語通訳生として横浜のイギリス公使館に着任したのは1862(文久2)のことでした。着任の1週間後に生麦事件が勃発するなど幕末の激動期の日本を見えています。

サトウはまれにみる語学の才能に恵まれ、日本語の読み書き会話の基礎をわずか3年余りで習得し、

他にラテン語を始めヨーロッパ各国の言語、朝鮮語、タイ語、シナム語、中国語等をマスターしていました。ヘボン式ローマ字で有名なアメリカ人宣教師ヘボン氏やブラウン宣教師から日本語の基礎を学び、あらゆる日本人とお付き合いをして日本語を獲得し、書道もたしなみ「静山」の号も取得しています。また、日本名「薩道(さと)愛之助」を使用しています。(写真1)

1871(明治4)年頃、武田兼かねと所帯を持ち(写真2)、1883(明治16)年次男武田久吉が誕生しています。久吉ものに尾瀬の保護活動や植物学、民俗学の立場などで

活躍をしています。サトウは、1870(明治3年)から1882(明治15)年までの12年間、新政府の近代化政策への助力の外、公私にわたる精力的な旅行、登山をしています。特に旅行は1858(安政5)年に調印された日英修好条約に盛り込まれていた、開港地より10里約40キロメートルまでの外国人の旅行規制がありました。サトウは外交官特権で制約を受けずに自由に旅行をしました。その上、その制限も1873(明治6)年に緩和され、病気の療養と学術研究のためであれば一般の外国人もどこへでも出かけられるようになりました。

1882(明治15)年末に日本を離れ、1884(明治17年)から1895(明治28年)まではシナム、ウルグアイ、モロッコなどの公使を務めています。1895(明治28年)、12年ぶりに日本へ戻り第

6代駐日公使として、日清戦争後の三国干渉、対ロシア問題での日本をバックアップ、日英同盟の土台作りなどをしました。晩年は1907(明治40)年、64歳から亡くなる86歳までの22年間、イギリス西南部のオタリーセントメリー村にて、読書と執筆の日々を送っていました。

業績その1 英国論議の発表

1866(慶応2)横浜居留外国人向けの英字新聞「ジャパンタイムズ」に無題 無記名で3回にわたって英国の今後の方針と日本の新しく進むべき方向について持論を掲載しています。

サトウの日本語教師、阿波藩士沼田寅三郎の懇請で一緒に和訳し、非売品で出版したものが流出してしまいました。その論旨をみると、締結した条約が「ミカドの不勅許」によって不履行になる問題を重視し、「將軍大君は単に大名連合の長であり、真の日本の支配者ではない。イギリス女王と大君は同格ではない。我々は、今まで大君と結んでいた条約を破棄し、真の支配者(ミカドと大名連合の合休政体)と新しく条約を結ぶべきだ」と主張しました。

中立を堅持するイギリスでしたが、パークス公使はこれを黙認しました。時代を变革しかねないこの大胆な論旨は、その後西郷、木戸、大久保ら薩長の開国志士には強烈な影響を与え、1867(慶応3)年の、坂本竜馬の「船中八策」発想の土台になったのかもしれない。

業績その2 初の外国人向け

英文旅行ガイドブックの発行

「中部・北部日本旅行案内初版」(明治14年)を出版しました。友人の退役海軍将校ホーズとの共著で、日本での12年間の旅行、登山の集大成です。英文で書かれたB6版の手軽に持ちやすいサイズとして編まれ、日本の概説

としてお金のこと、着るもの、天候など15項目にわたって旅行に役立つ日本人の生活が具体的に説明され、第2版では旅に便利な日本語(330語)用語集まで掲載されています。そして、関東から東海道、東北、関西、富山、中仙道、信州、越中、飛騨山脈などめぐる54のルートを紹介しています。

帰国のため1891(明治24)年の第3版からは編集権を友人のチェンバレンに譲り、題名も「日本旅行案内」とし、1913(大正2)年まで32年間、9版を重ねる大ベストセラーとなりました。

なかには、大町周辺を訪れたことを紹介した記事もあります。1878(明治11)年7月にサトウとホーズと一緒に碓氷峠から上田に入り、サトウは地蔵峠、菅野の峠を越えて陸郷、池田へ向かいます。池田では「やまこ」と呼ばれる野生の蚕から作る絹のことに触れています。また、「ぶゆ」が厄介で、湿らせた藁で作った火縄に火をつけて、その煙で虫除けをしている様子も述べています。

一方ホーズは、保福寺峠・日向・明科・池田から大町の経路をたどり、サトウより遅れて大町に着いたようです。

大町は池田と同様に、大変古風で、木でできた平らな屋根にはアルプスの小屋に見られるように、平たい重い石が乗っている様子が書かれています。(写真3)

二人は3日後、野口、大出を経て針ノ木峠に向かっています。

このガイドブックは、「日本アルプス」という言葉を最初に活字で表した本で、「日本旅行の百科事典ともいえ、本書を持たないで旅するのは富士山に裸足で登るようなもの」と横濱で発行されていたジャパン・ウィクリー！



写真3. 明治10年ごろの大町の町並み(横川仁氏提供)

メールで書評され、「外国人が書いた、旅登山の案内書だがこれに勝るものは無い。特に日本アルプスの記事は日本の地理書にも無く、多くをこの本から教えられた」と、日本山岳会創設者のひとり小島烏水が「山岳1号」で述べています。

業績その3

「外交官が見た明治維新」の発行

サトウは日本に出発する1861(文久1)年から死去する2年半前までの65年間、日記を書き続けました。45冊にもなる膨大な日記帳は、イギリス公文書館に所蔵されており、横濱の開港資料館にもマイクロフィルムの複

製が保管されています。この本は、日本に初めてやってきて滞在した6年半の日記を基に、激動する維新開国の動きを晩年の1921(大正10年)、78歳の時に回顧した詳細な記録で、ロンドンにおいて出版しました。そしてこれは日本近代史には欠かせない貴重な資料となっています。

正確な日時、登場人物は全て実名で、内容があまりにも赤裸々なため(特にミカド「孝明天皇」についての記述)、戦後25年間はいわば禁書扱いされていましたが、1960(昭和35)年、初めて岩波書店から全訳(坂田精一訳)され刊行されました。

「人生の中で明治維新の激動の中に身を置いた充実感の、あの時期こそが最も光り輝いた時」との切なる思いが、今の静かな晩年の中で再び光り輝いて、この本に結集したのだ」とサトウは述べています。

いずれにしてもサトウと次男久吉(写真3)の登山と植物で結ばれた父子の絆は、日本の山岳文化を語る上で忘れてはならないと思います。

(元NHKロンドン支局海外特派員、富山国際大学を経て、平成17年より白馬村在住)

(補注)上記の文章は、平成25年度大町山岳博物館友の会総会における記念講演会「アーネスト・サトウと武田久吉の金子靖夫氏による講演要旨」と同講演会で使用された作成資料をもとに、アーネスト・サトウの日本に関する業績について、山岳博物館においてまとめたものです。

(編集:宮野典夫)

「槍ヶ岳略縁起」について

穂刈 貞雄

『槍ヶ岳略縁起』は、播隆上人の槍ヶ岳開山の由来を詳細に記したもので、極めて重要なものであります。古くは大正五年、松本の鶴林堂書店より単行本として『槍ヶ岳案内記』が出版されましたが、その中に「槍ヶ岳略縁起」全文が掲載されていたと云います。しかし残念ながら現在その書籍は見当たらず、鶴林堂書店の関係者が古本市で探している、そんな状況です。

大正時代には、播隆上人は有名ではなく、『槍ヶ岳略縁起』も広く知られることなく忘れ去られてしまったようです。『槍ヶ岳略縁起』が広く知られるようになったのは、昭和六年、笠原鳥丸氏により岐阜の太田町で発見されたことによります。その後、梓書房の『山』で『槍ヶ岳略縁起』が発表されてから世間に知られるようになり、播隆を研究する人には大変価値があり信頼すべき資料となったのであります。ところが最近になり、この縁起が播隆の書いたものではないと云う疑義が一部で出されるようになってまいりました。

『槍ヶ岳略縁起』は播隆謹言とあるように播隆の篤信家の大原屋佐助が、播隆の文章を摺師に依頼、版木にて大量に印刷して信者に配布したものであり、播隆のものであることに間違いありません。また現在、『槍ヶ岳略縁起』は、岐阜県立図書館 祐泉寺 筆者のものなど三冊が現存するという貴重なものであります。

ネットワーキング播隆の代表である黒野こうき氏

が、文政九年播隆槍ヶ岳初登頂説を唱え出したのは『行状記』によつていいます。そこには「凡て壱百間斗りの立岩空に聳えて峨々としり、登上古来一人もなきとかや、眞個鎗の直立如し、其嶺頭へ師一人登り給いて一夜を明曉し、再び降りて彼岩洞辺に來り……」とあり、文政九年の第一回槍ヶ岳登山のときに、播隆は山頂に登つていたのであるとのことは、『槍ヶ岳乃美観』も同様であります。（『播隆研究第五号』）

『行状記』は、岡山隆心氏が漆間戒定氏に委嘱して一般向きに脱稿したもので、その内容には不確実の部分が多く、年月の記述は唯一ヶ所あるのみで研究書にはなり得ないものであります。『槍ヶ岳乃美観』も『行状記』を下敷にしたもので、各所に誤りが見受けられます。私が『播隆研究』第九号の「播隆上人鎗ヶ岳初登頂に疑問の中で、いくつかの誤りを指摘し、「前略」「美観」の文章は支離滅裂である。これを以つてすると、「美観」の著者達は『略縁起』の存在さえ知らなかった証拠である。（中略）『美観』の著者達は、播隆の真実を綴る『略縁起』を知らずして『行状記』に盲従していたと云えよう。『略縁起』は播隆自身が発した言葉である。」と述べ、今も考えは変わりありません。

明治維新になり社会の旧体制が変わり、仏教はその勢いをそがれ、神道は隆盛になりました。江戸末期、播隆上人生存時に出版された『槍ヶ岳略縁起』と、維新後の明治一、三十年に出版された『行状記』、『槍ヶ岳乃美観』とは全く価値が違うのであります。『行状記』、『槍ヶ

岳乃美観』は大衆向きの出版であります。『槍ヶ岳略縁起』は念仏行者播隆の発した言葉であります。したがって播隆の槍ヶ岳初登頂は第二回登山の文政十一年であることは明白であります。

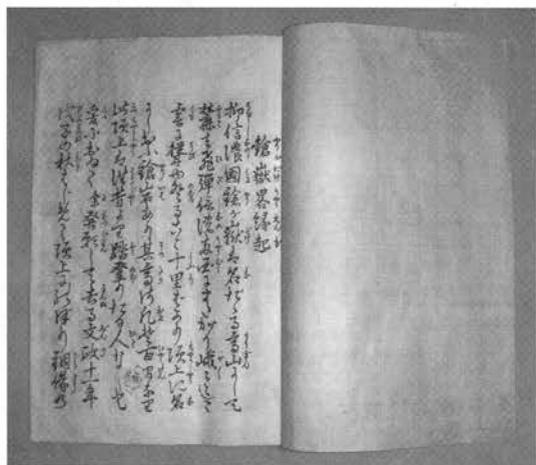
ヨーロッパでは長く悪魔の住む家として恐れられていた山も、日本では山岳信仰の対象として古くから畏れられ敬われる存在でありまし

た。槍ヶ岳にかける鉄鎖が信者達により運ばれてきたのに、折からの凶作のため松本藩に差し押さえられたのは、槍ヶ岳に対する畏敬の念からであります。またウェストンによる明治二十五年の笠ヶ岳第一回登山は、蒲田川が氾濫して道が荒れて登れないと断られます。更に次の年も若者が雨乞いで出払っていると云つて断られ、第三回も村の祭りで人がいないと断られました。二人の勇敢な獵師が案内を買つて出てくれば、漸く登頂に成功しました。播隆の第一回登山も槍ヶ岳を畏敬の念で崇拜し、山頂へ登ることは神の怒りに触れると恐れ謹みました。清浄無垢の地なれば何卒上品の阿弥陀尊像を槍頂上に安置して、播隆ははじめて頂上に立つたのであります。

（槍ヶ岳山荘グループ会長・日本山岳写真協会名誉会員）

山岳博物館では、平成17年に「播隆 槍への道程」の企画展を開催致したとともに、山を神聖視し、崇拜の対象とした例として槍ヶ岳を開山した播隆上人について現在の常設展示で紹介しております。このたび槍ヶ岳の開山に関して、穂刈氏よりご意見が寄せられましたのでここに紹介致します。

（市立大町山岳博物館）



『槍ヶ岳略縁起』（複製・大町山岳博物館蔵）



山と博物館 第58巻 第2号
 発行 千長野県大町市大町八〇五六一
 398-0002 市立大町山岳博物館
 TEL 〇二六二二二〇二二
 FAX 〇二六一二二二二二
 E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
 URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
 印刷 株 奥村印刷
 定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
 郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七二二二九九